

桜蔭

桜蔭俳話会 十二月句会 (第三二一回)

平成二十四年十二月十六日(日) 会場・桜蔭会館

【佳句鑑賞】

癌疑惑晴れたる朝や息白し

友子

癌の疑いが晴れた安堵感と確かな生命活動の証しである呼吸とを配合した点が巧い。自らの生命への危機を「癌疑惑」と表現したことも軽妙である。『疑惑』という言葉は、新聞の社会的に言えば、「事故隠し疑惑」、「脱税疑惑」というように自分以外の者の行動や処置に対する法的懷疑や倫理的懷疑を表す時に使うのが普通である。

この第三者的に物事を評価するときに使う用語を、自らの罹病の嫌疑に対して使用したことに、癌にだけは罹りたくはないという作者の気持ちの方が反語的に切実に表れている。

ただし、息白しを現実認識できるのは、関東地方の気温条件では朝方であるから、「息白し」に「朝」を重ねたことが残念である。出来れば「朝」を消して欲しい。たとえば、「癌疑惑つひに晴れけり息白し」とすることもできる。

【自句自解】

列島の劣化果てなし冬の星

守

高度経済成長期に造られた日本列島の橋や道路、ビル建築物は耐用期間の終わりを迎え、各地でその綻びや劣化が報告されている。なかには基本設計の吟味不十分や施工管理の甘さも指摘されている。これに対して土木建築業界は莫大な建て替え・更新需要の到来とばかり色めきたっている。国土強靱化を旗印とした建設予算という名の血税の分捕り合戦である。

本来に必要なものは再建し、そうでないものは廃棄するというように冷静な判断を下す絶好のチャンスでもあるが、後の世代の負担を倍加しても現況を何が何でも脱却したいとする景気浮揚最優先のお題目には勝てないようである。中央省庁の政策立案者自体も劣化しないように望むしかない。

【佳句鑑賞】

やっちゃ場のセーター・半袖多国籍

幸

やっちゃ場とは青物市場のこと。氷河期が続く就職難にもかかわらず、一見汚くて辛い肉体労働を伴う職場は若者に嫌われている。その市場をのぞいたとき、労働者の多くが外国籍と思われる人たちでることに気付いた。自分が育った国の気候条件に従うかのように、ある人は半袖姿であり、ある人はセーターを着込んでいた。風景に溶け込んでいる着衣に着目し、着衣から我が国の労働環境の実態を指摘し、日本人の食生活の少なからずの部分が外国籍の人たち支えられていることを、的確に言いとめた上質な鋭い作品である。

【佳句鑑賞】

覚えなき小箱の中味冬の夜

秀一

ある冬の夜、別の物を探しているとき、とある小箱を手にした。その小箱を開いて見ると、中味は覚えのないものであった。ここで作者は覚えがないと断言しているが、小箱に入れた当時は本人にとって大事なものであった筈である。忘れたとすれば、この句は単に記憶の風化を詠んだものである。

しかし評者には、本人は中味にまつわる出来事を想起したに違いない。覚えがないと言ったのは、作者特有のはにかみによるものである。このとき作者の記憶は鮮やかに復元し、しばし当時に思いを馳せたのではないか。

【佳句鑑賞】

浮寝鳥またも約束忘れけり

秀一

長旅の身をゆったりと水に浮かべて休ませている浮寝鳥がいる。色々な約束や雑事に追われて気忙しい日々を過ごしている人間から見ると、うらやましい限りの存在である。浮寝鳥を眺めていた作者は、ある約束を忘れていたことにふと気付く。それでも約束を忘れていたことに狼狽せずに、悠然と浮寝鳥を見ている。物忘れし勝ちとなった自分をしようがないと黙認している自然体の自分がもう一人いるようだ。

【自句自解】

障子貼る妻の不機嫌解せぬまま

守

室温管理のためのサッシ構造の普及が進むにつれて障子はだんだん数を減らしている。障子が残っている家でも障子紙の張り替えは専門業者に任せることが多い。映画の「三丁目の夕陽」の時代には、どの家でも障子貼りは家人が自ら行う年用意のひとつである。作業は冷たい水で障子の棧を清めることから始める。子供の頃よく手伝わされたものである。

自ら率先してか或いは命じられてかどうかは知らない、今日は夫が障子貼りをしている。後ろで別の年用意をしている妻はなぜか不機嫌である。「三丁目の夕陽」の時代にどこかの家であったかも知れない光景を詠んできた。

【佳句鑑賞】

トス上ぐるやうにミサイル冬空へ

明美

隣国は諸外国の制止の声に耳も貸さずに人工衛星と称する大陸間弾道ミサイルの発射を強行した。作者はこのミサイル発射の有り様を見て、バレーボールでトスを上げるようだと言った。この「トス上ぐる」の表現は、児童めいた隣国の愚行を物の見事に糾弾する卓抜な把握である。

新聞紙面などで多くの字数を重ねた批評論文を目にするが、たった十七文字で隣国をすっぱり断罪できるのは、まさに短詩型の俳句が持っている固有の力である。

【佳句鑑賞】

枯蠅螂斧振る気迫残りをり

友子

枯蠅螂は冬に入って見かける蠅螂である。一般の観念的理解では、蠅螂の動きは流石に鈍いものとされている。しかし、作者は実見した枯蠅螂は、蠅螂の命の象徴である斧をその蠅螂がさつと振ったと知っている。これを蠅螂に気迫が残っていると言いとめたのである。

実際に対象を観察して一句を成すことは大切なことである。評者も最近、枯蠅螂に出会った。最初は胴体をつついても大した反応はなかったが、いたずらが過ぎると怒ったように斧をさつと振り上げた。

【佳句鑑賞】

ひとり居の大根一本厨に立つ

ツル子

一人暮らしには余りある大振りの大根を買って来た。調理台の脇に立て掛けられたその大根はあたかも厨の主のようにでんと構えている。

このような句意であるとすれば、「大根一本」では情報不足と思われる。総称的表現で「一本」というよりも、その大根の具体的性状を言った方が良い。とすればこの句は、「ひとり居の大根でんと立つ厨」にすることもできる。

【佳句鑑賞】

遠き富士あかねに消えし石露の花　ツル子

冬夕焼に消えて行く富士山が遠景にあり、近景には今が盛りの石露の花。赤と黄の色の対比が効いている。この句は言葉の順序を整理して、「遠富士の消ゆるあかねや石露の花」というようにすることもできる。

【佳句鑑賞】

店共に人それぞれと冬に去る　真三

近所の商店街のある店が店仕舞いしたという。顔見知りの店員も店の消滅とともに皆いなくなったという。冬に感じる寂しさが、顔見知りの人が消えたことによって増幅される。

この句を難解にしているのは「共に」及び「と」の存在である。句意が前記のようであるとすれば、店員を前面に出して、「店員の店もともに消えし冬」とすることもできる。

【佳句鑑賞】

枯枝揺れ静かな町の灯ゆれる　ヤエ子

枯枝の揺れに町の灯の揺れを重ねたところが非常に巧い。この場合、「揺れ」のリフレインが見事に効いている。ただし、冬の町の灯が「静か」であることは、冬の町の灯に既に含まれていると思えるので、これは省略できるのではないか。そうだとすれば、この句は「枯れ枝の揺れて町の灯ゆれにけり」とすることもできる。

〈この他、秋の季語を入れた作品に入選句がありました。十二月開催の定例会です。「冬季雑詠」の基本ルールに従って、鑑賞は割愛しました。〉

文責・代表　増田　守

事務局より…

一月例会は恒例により、簡単な食事と談笑の時間を過ごした後、句会に入ります。